

「中国法学者」という人生について

但見 亮

年末で首が回らないほど忙しい時期に、こんな駄文を書かなければならなくなつたことを、今さら猛烈に後悔している。しかもこの部分などは台湾からの帰りの飛行機で書いているので、文字通り空文の極みである。

残念なことに、これはすべて自分が安請け負いをしてしまったためなので、後悔したからと言って訴訟を起こす訳にもいかない。仕方がないので、大して読まれもしないだろうと期待することにして、「飲み会のトークみたいなやつでお願いします」という依頼人の言葉に沿った仕事をすることにした。そんな訳で、ジジイの飲み会トークなんて聞きたくもない、という方とは、ここでお別れするのがお互いのため、ということになるだろう。

さて、読み手がもう一つわからないので、何から始めれば良いのか少し検討がつかないが、自分は中国法の研究と教育を生業としており、学部を卒業して中国に留学したのがいわば登山口だとしたら、もう 30 年以上にわたってこの山道だか茂みだかを彷徨っている。だから多くの場合「自分は中国法学者です」という自己紹介で話を始めることになる。

もちろん友人や知人など、仕事と特に関係のない場所で「中国法学者でございます」なんて小っ恥ずかしいことを言うわけではないが、仕事や研究について聞かれてしまったら、残念ながらそう言うしかないのだ。

「残念ながら」というのも変な話ではあるが、憲法や民法、刑法そして訴訟法など、誰でも（名前は）知っているものや、頭に「国際」とか「比較」とか（お尻に「哲学」とか「史学」とか）立派な接頭（接尾）辞がつく学問は、その存在意義や選択理由が問われたりはしない。それが重要であり価値があることは言うまでもなく、周囲もわかってるふりをしておくほうが賢明な選択だ。

不幸なことに、中国法はというと、「なんでそんなの選んだんですか?」と真顔で聞かれるのが常である（ネタバラシをしてしまうと、本稿の依頼者にもそう言われたことがある）。こちらでも散々聞かれて来たので、三国志が好きだったとか、中国自体に関心があったとか、法学部で中国語選択だったから合わせ技でとか、TP0 に応じていろんなことを言う程度には器用になった。もちろんいずれも嘘ではないのだが、本当になぜこの道を選んだのか、とマジメに考えてみると、結局成り行きで、というのが最も正確であると思う。

思うに多くの場合、一つの結果に対して決定的な一つの原因を探ることなどではしない（その証拠に、判例の因果関係認定は大概嘘くさい）。何かがなぜそうなったか、ということにはいくつもの理由が複雑に絡み合っていて、そのどれもが重要であるようにも、逆にどれもが決定的ではないようにも見える。総合的とか有機的とか立派な話でごまかすのも一つの手ではあるが、ありていに言うと、要するに「成り行き」というのが最も適切な表現であるように思えるのだ。

色々こじつけがましいゴタクを述べてしまったが、少なくとも自分が「中国に行きます!」と公言したのは、正に成り行きそのものだった。

卒業を控えた某年、就職活動に大忙しの友人たちを傍目に、自分は何だか無為に過ごしていた。若い読者（いるとしたら）のために補足しておく、自分は所謂バブルの尻尾の方で大学生活を送ったので、友人たちはみな良い就職先をいくつも抱えて内定だか内々定だかを断るのに大忙しで、やはり内定だか内々定だかでしょっちゅう旅行に行かされていた（但し、就職後は皆苦勞することになる）。

こういう事情で、まともな卒業予定者たちは忙しくて自分などにつき合ってくれないから、最終年度はつき合いの良い後輩を連れ回しては飲み歩いていたのだが、夏頃だったろうか、いつものように後輩と高田馬場で飲んでいたら、なぜか「最近の若者」（注;30年以上前である）の代表として、知らないサラリーマンに長々とお説教を喰らうことになった（彼の名譽のために言っておくと、ちゃんとおごってくれた）。

考えてみたら「いい若いもん」（同上）がダラダラと酒を飲んでるんだから、夜までお仕事ご苦勞様な方から見たら、そりゃ説教もしたくなくろうというものだ。「青年よ世界に出てよ!」的な話になったのも、ありがちなお説教の流れ、ということができるだろう。

そんな話は適当に流しておくのがカシコイオトナというもののだが、ワカゲノイタリとかサケノイキオイとか、なぜか気づくと「自分は中国に行きます!」とハッターまがいの宣言をするハメになっていた。

今考えてみれば、酒席の戯言などカキ捨ててで良さそうだが、終電を逃して徒歩で帰宅する道すがら、ムダにアツく後輩に語ってしまった手前引っ込みがつかなくなったからなのか、日本にいても特にすることもないからなのか、結局その流れのまま、翌年中国に行ってしまったのである。

今思えば、実は心の底で中国に行きたいと思っていたのかもしれない、という気もするが、その後足掛け6年も中国にすることになるのだから、サケノイキオイというのは恐ろしいものだ。

そんなこんなで、ほぼ成り行きだけで中国（上海）に行くことになったのだが、そんな輩に立派な目的意識などあろうはずもない。結局日本にいた頃と大して変わらず、否むしろ、一層成り行きまかせに生きていた。

最初のうちは、一応授業に出たりしていたのだが、すぐに授業など出なくなり、昼過ぎに起きたらメシもそこそこに悪友達と麻雀を打ち、夜は街に繰り出し深夜（早朝?）に帰宅して昼まで寝る…というルーティンにハマってしまい、いつの間にか「飲む打つ…」の生活に堕していた。

不遜な話ではあるが、かの竹内好先生も一時北京で似たような(?)生活を送っていたようだから、中国研究者には少なからずそういう時期があるのだ…と嘯いてはみたものの、一度など大騒ぎした後に酩酊したまま徘徊した挙句、気づくと見知らぬビルの非常階段で酔い潰れており、階段のゴミだかドロだかで白Tシャツがボーダーになっていたくらいだ。今となっては笑い話、あまつさえ武勇伝にすらなりそうだが、こんな状況が長く続いていたら本当に廃人になるか、またはのたれ死んでいたかもしれない。

そんな生活から戻ってこれたのは、もちろん自分の真摯な反省と弛まぬ努力の賜物、などではまるでない。くさい話というかありふれたオチで申し訳ないが、出会いや縁、そして時代の空気や社会環境に、都合の良い勘違いが絡まり合って、少しずつ（ある程度）自堕落な生活から抜け出し、いつの間にか学問の道に迷い込んで、今まで歩き続けることになった、という以外に説明のしようがないのだ。

ありがたいことに、物事の原因と同じかそれ以上に、お陰様と言える出会いは無数にあり、思い出せる人や出来事だけ探しても、そのリストでこの駄文が終わってしまう。またこんな駄文で、名前を挙げて具体的な（個人的な）話をするのも憚られるところだ。とは言え、読者の方には（自分ほどではなくても）無為な日々を過ごしたり、何かから抜け出せなくなっている方もいるかもしれない。だから何かきっかけというか、変化への過程を示せるような話だけでもしておこう。

中国に行って最初の頃、自分はいわゆる留学生楼に住んでいて、やはり成り行きでほぼ同

時に来た2歳ほど下の関西人と相部屋になった。彼は自分とはえらい違いで、熱心に授業に出て、部屋はきれいに片付け、自炊の時は自分の分まで用意してくれた。この相方に加えて、同時に来た数名の日本人留学生、そして現地で知り合った韓国人留学生とは、飲んだり遊んだりもしたが、時に深夜まで夢やプランを語り合い、（実現の有無はともかく）反省や決意を共にした。

留学生のこういうメンタルは、上海の空気にも支えられていた。当時、人々も社会も夢と希望に溢れていて、明日はもっとよくなるはず、という空気に満ちていた。加えて、総じて中国人は非常に積極的で、（良くも悪くも）自分に正直であり、粗相や齟齬を（あまり）恐れない。そのメンタルをダメ元という言葉で表現するなら、それは大きな間違いだろう。彼らは往々にして、根拠のあるなしに関わらず、強固な自信に満ち溢れているからだ。

余談だが、米国人は夢が実現したときの気持ちを“Surreal”と表現することがある。シュールレアリズムと同源で「超現実的」といった意味だが、何かを夢と言ってしまうと、儚さや非現実といった語感があるところ、努力や奮闘を経て現実を超えるかのような状況に（現実）に浸るというのは、なんともアメリカ人らしいリアリズムと言うべきか、ポジティブな思考法と言うべきか。

思い返すと、自分は所謂バブル時代に過疎で有名なド田舎から東京に出てきて、その後（超）高度経済成長期の上海に渡った。要するに10代から20代の終わり頃まで10年以上にわたり、イケイケというかアゲアゲというか、田舎者には目の眩むような艶やかな都会で（表面上）ムダに明るい時代と環境にどっぷり浸かって生きていたことになる。

それはどこか地に足のつかないというか、軽佻浮薄な自分のメンタルを醸成した元凶（何事も人のせい）であるとも言えようが、「明日があるさ」的にポジティブな思考法（？）を持てるようになったのは、やはりこの時代と環境のお蔭というべきだろう。

話を戻すと、この夢と希望、そして根拠不明な自信に溢れた世の中で、友人や知人に励まされ、また中国での恩師との出会いもあって、自分の中に学問や研究への思いが膨らみ始めることになった。同時に、片言の中国語と申し訳程度の学歴を、非常に優れた能力や資格であると勘違いして吹聴するという能力が開花し、そのお蔭で仕事をもらったり大学院に入ったりすることもできた。

この勘違いの極みというべきは、日本の指導教授とのやり取りである。上海で修士2年目

に入る頃、久しぶりに学部時代の恩師を訪ね、教職員レストラン（だったと思う）でコーヒーを飲んでいたら、先生はなんと「中国で修論を書いても日本で使えるわけじゃないから、こちらの大学院に帰ってきなさい」と言うのだ！クールな人で自分には関心もないと思っていたので、大袈裟でなく猛烈に感動し、上海の恩師には学業半ばでの帰国をお詫びして、その年の入試を受けて日本の大学院に帰ってきたのである。

後にやはり酒の席だったか、先生にしみじみとこの話をしたところ、「そんなこと言っていない」の一言…これには呆気に取られたが、さすがに白日夢を見るような状態でも年齢でもない（と思う）ので、きっと言葉の端々を都合良く勘違いしたのだろう。ちょうど中国で面白い仕事のオファーもあったし、この決断が正しかったのかは分からないが、この勘違いがなければ「中国法学者」という人生を歩むこともなく、皆さんがこの駄文を読む必要もなかったはずだ。

蛇足だが、恐らくこの肩書や経歴を都合よく勘違いして、日本の研究機関や政府機関などが「奇貨居くべし」的精神で雇ってくれた訳だし、凡そ世界は多かれ少なかれ複雑な勘違いの繋がり成り立っているようだ。もちろんそれはいつも都合よく働くとは限らず、その逆の場合も少なからずあるように思われるのだが。

ことほど左様に、成り行きにうまく流されるまま、根拠のない自信と都合の良い勘違いのお蔭もあって、この学問の道に迷い込むことになった。とは言え、一つの道を選び、それを歩み続けていくことにしてしまったら、もう成り行きだけではやっていけない。そこには目標が必要だし、その実現のためには継続や蓄積も欠かすことはできない。

困ったことに、生来の堪え性のなさのお蔭で、努力や忍耐が長続きした試しがなく、深淵な（高邁な）目標のために日々邁進する、なんていうのは無理に決まっている。ではどうするか、ということになるが、自分にとって楽しいことを目標にし、その実現のために楽しい方法を選べば良い、というのが自分なりの答えだった。

もちろん世の中には、崇高な目的の為に邁進し続ける理想家もいるし、辛く苦しい鍛錬をものともしない強者もいる。艱難辛苦が趣味という変態もいるだろう。大体何をするにせよ辛いことはあり、楽しいことばかりやられてはいるはずもない。そもそも楽しいことは人それぞれだし、生業もまた様々だから、自分の方法など誰かにオススメできるものでもないかもしれない。

いずれにせよ、自分は概ね研究と教育を生業にしているので、それを何とかして楽しいも

のにしなければならなかった。そして得られた答えは、結局自分が歩んで来た人生の中で楽しいと思った物事に、それを近づけていくことだった。

自分は大してうまくもないが小さい頃からピアノを弾いていて、同様に野球をやっていた。また洋楽を聞くのも大好きで、スポーツ感染 (I mean it) ではアメフト狂であった。これを自分の生業に重ね合わせると、リズムとハーモニーを感じられるような論文を書き、スピード感とアクションに満ちた授業をする、という感じになる。

残念ながら、自分の授業を取ってくれた学生、そして拙論に目を通してくれた読者がこれを聞いたら、鼻で笑うか腰を抜かすか、どちらにしても、こんな目標を持って書いていた（喋っていた）なんて全く感じられなかったに違いない。正直なところ、この目標は今のところ叶わぬ夢に終わっている。それどころか、授業のパフォーマンスには自分でもがっかりするし、論文は読み返すのが嫌になるようなものばかりだ。

ただあくまでも自分としては、楽しく見える対象を選び、楽しく読めるような筆致で（または楽しく聞けるようなトークで）楽しく思える内容を提供することを夢見てきたし、今も夢見ている。そしてごくたまに、自分の授業を「オアシス」と言ってくれる学生がいたり、自分の論文を「読みやすい」と言ってくれる読者がいたりすると、達成感や充実感でいっぱいになり、この道を選んだ悦びに一杯やりたくなるのだ。

さて、御後もよろしいようだしこれで打ち止め、さあ一杯やりに行くか！…と思ったが、念のため依頼文を確認すると、何と 1 万字くらい書けと書いてある！論文だって字数が足りなくて苦勞する人間なのに、初めて書くコラム(的な文章)でこんなに字数を書けだなんて、依頼人も本当に無理を言うものだ。

そんな訳で少し書き足さなきゃいけない、というまことにネガティブな理由のみで、以下内容を追加することになった。飲み会で言うと、少しテンションが下がってきてまったりと昔話をするような時間帯だ。だから飲み会の席の昔話なんて御免蒙りたい、という人には、心からの感謝を申し上げてここでお別れ、ということにしよう。

となると、最早この先は無観客公演（しかも一人芝居）かもしれないが、約束なので仕事はしなきゃならない。では何を書こうかと思ったら、ここまで散々楽しい楽しいと書いてきた割に、何が楽しいのかがよく分からない、ということに気がついたので、そこをちょっと掘り下げてみたいと思う。

少し細かい話をすると、自分は中国法の中で、どちらかというと統治理念や制度構造のよう

なものを主な対象にしており、個別の法領域では憲法や行政法そして刑法といった（日本では）公法とされる領域について検討することが多い。それは要するに、ビジネスっぽいものとか技術的なものに映る領域が、自分にとってあまり楽しくないからだが、だからと言って公法系の科目が、初めから楽しいものだったわけではない。

今はもうセピア色の記憶になりつつある 18 の春、意気揚々と法学部に入ってしまった小生は、4 月には早くも嫌気がさし、5 月にはほとんど授業に出なくなっていた。これはもちろん、生来からの怠け癖というか、ないものねだりの言い訳癖というか、要するに大方自分が悪いわけだが、大学の授業だってひどいものだった。

当時は所謂マスプロ授業が当たり前で、受講者数百人なんていう授業もざらであった。入学前は「高瀬舟」に触発されたこともあり、刑法学を一番楽しみにしていたが、刑法総論の授業では、教授と思しき人が遥か彼方で何かつぶやいており、その内容もコーセーヨーケンとかコーイムカチとかソキヤクジューとか、ドイツ語由来の訳語は無味乾燥の極みで、それ自体がドイツ語かと思うような意味の分からないものばかりだった。

後になって、中国の大学院では刑法を専攻し、日本に帰ってから刑法絡みの研究や交流にどっぷりハマるのだから、人間わからないものだ。それどころか、この意味の分からないことを遥か彼方でつぶやいていた人（大先生）には、修士博士を通じて大変良くして頂くことになった。この場を借りて陳謝と感謝を申し上げたい。

話を戻すと、大学の 1 年目は、転学部とか編入学とかはたまた仮面浪人とか、そんなことばかり夢想していたのだが、そのうち単に学校に行かなくなり、行ってもサークルか雀荘で U ターンする始末で、授業には全く出なくなっていた。

何だか言い訳ばかりで恐縮だが、当時は法学部なんて授業に出る方がおかしい、という風潮があった。勉強しない奴は当たり前として、勉強する奴は司法試験に命がけだから、やはり学校になんて出てこない。語学以外は出席なんてとらないし、レポートもない。授業は通年で成績は期末試験一発勝負だから、1 月には必死で「友人」を探してノートを入手し、出題される論点に山を張って「模解」を一夜漬けで覚える、というのが典型的な法学部生であり、24/7 で司法試験の勉強をしてるから試験勉強なんて必要ない、というのが模範的な法学部生である。

その意味で模範的でも典型的でもなかった自分は、ほとんど授業にも出てない上に「友人」からのノート入手もなかったので、及第点を取るためにムダに勉強しなければならないハメになった（そのおかげで学問の道に進むことができたのかもしれないが）。

稀有なことに、4年次にとった法哲学はなぜか面白かったので、ちゃんと出席してこまめにノートを取っていた。この法哲学、4年次必修で歴年の落第者を含め数百人が取っているはずなのに、夏前の授業では出席者わずか4人、そのうち2人は後ろで漫画を読んだり話をしたりしており、もう1人は明らかに途中から寝てしまったので、その日の出席者は実質自分だけだった。その結果、1月には大量に「友人」が増え、気の利くやつはメシをおごってくれた。やはり授業はマジメに出た方がよい。

「友人」で思い出すのは、語学クラスで同級だった付属校出身のS君だ。大学の付属校もいくつかあるが、彼は最も都心にあるイケてる学校（TKも同校）の出身で、自分の中では都会人の典型であった。自分のようなド田舎のどん臭い学校の出身者は、気の利くようなことが何一つできない、というかそのやり方自体が分からない。彼は逆で、何事も器用にこなしていくように見えた。実際に自分がノートを提供した相手の多くは、結局「可」か良くても「良」だったが、彼はしっかり「優」を取っていた。確かあの広告代理店を蹴って、TV局に入ったはずだ。スマートな人は、やり方というものを心得ているのだ。

正直を言うと、このとき少し成績評価の不条理を感じていたのだが、成績評価をする側になって改めて、その難しさを実感させられることになった。大教室で三ケタの受講者がいる授業はともかく、「中国法」なんて銘打った授業だと、受講者は多くても数十人、少なれば十数人ということもある。そうすると、学期の後半になると学生の名前と顔が一致し出して、とりわけ良く聞いている学生や、頻繁に質問に来る学生は大体把握することになる。

自分は基本的に試験を行うタチであるが、授業を熱心に聞いていた（というイメージがある）学生や、頻繁に質問に来た学生は、概ね良い答案を出すことが多い。とは言え、例外はやはり存在する。先に良い例外の方を言うと、名前と顔が一致しない学生から、エクセレントな答案が出るのが（ごくたまに）ある。中には今でも苗字を言えてしまうほど、唸られる答案もあった。

お察しのように、明らかに授業を熱心に聞いていた学生、または（かつ）頻繁に質問に来た学生が残念な答案を出す、という例外もある。正直言うと、前者よりもこちらの方が（ずっと）多い。近時は成績評価に対する異議などという、教員にとって罰ゲームに近いシステムが存在しており、そこで（書面ではあるが）この学生から詰問されたりすると、本当にいたたまれない気持ちになる。

恥ずかしいことだが、教育に携わるようになってから、とりわけ試験による評価をするようになって初めて、自分が言ったことが自分が思ったように理解されている訳ではない、ということに気づかされた。これはひとえに小生の愚かさ、とりわけ想像力のなさによるもので

ある。わかるように教えることができないばかりか、熱心な受講者が分かっていないことに気づいていない、というのは教員の能力の問題だ。

ただ有難いことに（罪作りに）世の中には、わからないなりに答案が書けてしまう器用な人や、下手な教え方でも要点を掴んでしまう賢明な人が、いつも一定数存在している。その結果、自分のようなダメ教員も、「ちゃんとできてる人もいます」という言い訳にすることができてしまう。

それもあってか、成績異議に対してはいつも「残念な結果になりました」、ということになる。もちろん回答には気持ちを込めて言葉を紡ぎ、教え方については反省と改善を心がけているが、総じて成績評価において「努力」や「熱意」という項目を重視する気にはなれない。厳しい試験を越えて入学した人たちに「よくがんばりました」みたいな評価を行うのは失礼だし、そもそも努力賞や奨励賞というのは子供だましである。

昔話に戻ろう。先ほども触れたように、授業については学校の方もいい加減そのものだった。古式ゆかしいカリキュラムは旧態依然の永久保存版かの如く、卒業に 160 単位も必要以上に、4 年次まで必修がしっかり入っていた。就職活動が 4 年次の 4 月によーいドンだった時代だから、4 年必修なんてみんな出るはずもないのに、1 教室に数百人という必修が 4 年次も（いくつも）入っているなんて、要するに授業なんてどうでもいいと思っているのだ。

そんな訳で、法学には早々から愛想を尽かしていたはずだが、その考えが少し変わったのは、恩師の中国法の授業を受けたことが原因だった。こんなことを書くと本人が調子に乗るから（まあこれを目にされることはないだろうが）あまり褒めたくもないのだが、イデオロギーの下に構成された統治制度に（明に暗に）現れる本質的な特徴、そしてその法制度及び公法を中心とした各法領域での顕著な反映を描き出す内容は、日本法の勉強不足を痛感させられるだけでなく、法制度や公法領域への興味と学習意欲を俄然高めてくれるものであった。

併せて、法制史畑の出身ということもあり、先生の中国法の理解はイデオロギーに止まらず、伝統法の思想や構造から現代法を透視するものであった。とりわけ律令制度（概ね刑法・行政法的）の深い理解に基づく（中国に限らない）制度分析は、世界史オタク的田舎者のハートを驚掴みするだけでなく、権力闘争や政治ゲームのような現状分析と比べて、科学的で骨太な真の学問であるように感じられた。

なんか体のいい提灯記事みたいだが、中国法に限らず、主要な法とは少し違ういわばナナメから見たような妙ちくりんな法学も、それを読み解いて語る力のある人間が研究・教育に当

たれば、法学全体を見据える(見直す)ダイナミックなパースペクティブを提供することができる。その意味で、中国法学は楽しさだけでなく、深遠で有意義なものとなりうるはずなのだ。もちろん、それは語る者の腕(骨)次第、ではあるのだが。

そんなこんなで、お達しの字数にも到達したようだし、とりとめもまとまりもない文字通りのやっつけ仕事をとりあえずまとめておくと、中国法学の魅力に取りつかれ、いつか音楽のような論文を書き、スポーツ感染のような授業をする、という夢に導かれて、よそ見も寄り道も迷走もいっぱいしながら、なんとかここまでやってきた、というのが自称「中国法学者」の人生、ということになる。

正直を言うと、この彷徨の中で、学生や院生、友人や先生そして同僚たちと、こんなに長い時間を通じて(酒を交えて)ガクモンの周りで自由に語り合い、あれこれ考え、何かを求め続けたこと、それこそが、きっと夢でも叶わない超現実的な現実なのかもしれない、という思いも、最近少しずつ高まりつつある。

研究や教育に山頂はないが、それは無限に続くものではなく、何事にも終わりはある。上海で自分なんかには仕事をくれた大恩人も、現地の大学院に拾ってくれた恩師も、今はもういない。多くの出会いがあれば、それだけ多くの別離があるのだ。

唐詩の「人生足別離」は酒を勧める歌の一句で、井伏鱒二がこれを「サヨナラダケガ人生ダ」と訳したのは良く知られる話だ。この訳には唸られるものがあるが、自分はこれに同感するわけではない。思えば本当に多くの出会いに恵まれて、心ある人の支えの中で、なんとかここまで生きて来れた。それは多くの別離を必然的に伴うものだったが、出会いや支えを忘れることはない。人生に別離は多いが、人生はサヨナラダケではない。

自分は今後も、これまでの出会いや支えを頼りに、この山の中でもう少し、夢見がちに彷徨っているだろう。その夢の途中で、自分との出会いが大事なものになる人も、ひょっとするといふかもしれない。自分が余るほど頂いてきた支えを、少しでも誰かにお裾分けできるように。それを新たな目標にして、残りの道を歩いていきたい。